

オレンジ色のエプロンを着た同じ顔で無表情の三人の店員が、黒いスーツに身を包んでカウンター席に座っている三人のサラリーマンの口に、ガソリンスタンドの給油ノズルをつっこんでいる。氷のように冷たい絵だ。この絵が切り取った現代の食の特徴はふたつ。「食べるひと」の機械化と、「食べるもの」の液状化である。(中略)拙著で描こうとしたことは、食事の、まさに「給油化」だったのかもしれない。台所が小さな「工場」となり、食の技法が化学反応過程になる、そんな歴史である。

おっちゃんキッチン(『食べることを考えること』所収)より

生きるとは“あいだ”がごによごによしていること



「燃料補給のような食事」石田徹也 (1996)
高橋博之(以下・高橋):僕は、ずっとこの絵のようなことを言ってきた気がするんです。

この絵の対極の世界のことを。僕もこういう食事をときどきしますが、一瞬はおいしいけれど、はかなくて記憶に残らない。これに對峙する「食べることは生きること」から得られる喜びを、どう表現すればこの大量消費社会を生きる人たちに伝わるのか。藤原先生ならどう表現しますか。

藤原辰史(以下・藤原):「食べることは生きること」という言葉は、シンプルでいいなあと思います。では、「生きる」という言葉には

どういうことが含まれているだろうかと考えてみる。それは「地球上の荒野に高橋さんひとり立っている。それは生きてることなのか」という問いにもなるんです。

多分、生きることというのは、「あいだ」にあることなんです。僕が好きな精神病理学者の木村敏さんの『あいだ』という本の中に、何が「生きる」なのかということについて書かれています。僕や高橋さんの胸の辺りに生きもの装置が入っていて、そこが体の各部位に「今こうしてください」と、ビビッと指令を出す。それに従って生きていくという生命観ではだめだ、というんです。胸にも脳みそにも何も無い。自分と、自分以外の誰かのふた

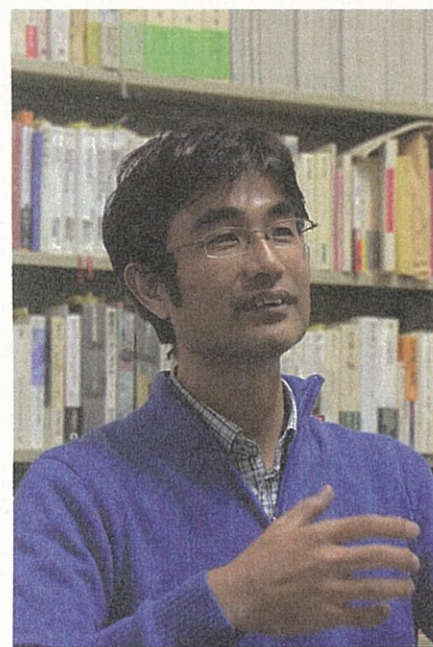
つがいたとき、そこから「生きる」が始まる。つまり、「相手がこう動いたらこう動く、すると相手もこう動く」という風に相互作用で動き、動かされる、その複雑形が「生きる」ということなんだと。

食べることは、生きること。生きるとは、そのように「あいだ」がごによごによしていること。今という時代はごによごによしていない。僕はよく比喩で使いますが、界面活性剤化しているんです。界面活性剤というのはシャンプーや歯磨き粉に入っていて、ものともが触れるときにつるつるといっようにする薬剤ですね。

高橋:なるほど、摩擦がないように。ア

店でおばあちゃんが指突っ ラーメンを食うかどうか

「農業とは何か? 食とは何か? なぜ、人間生命の根源であるはずの食は、これほどまでに衰微したのか? なぜ、食べものは、世界中のおなかが減った子どもたちに届かないのか? なぜ、食べものを自然から創り出す農業は、市場経済に馴染みにくいのか? このような問いを、歴史学の立場から考えること」を、研究の目的として掲げる藤原辰史さん(40。京都大学准教授)。その著述の数々に共感する編集長・高橋博之が、研究室を訪ねた。



藤原辰史 ● 農業経済学者

京都大学人文科学研究所准教授。40歳。北海道生まれ、島根県に育つ。京都大学人間・環境学研究所中途退学、同年、京都大学人文科学研究所助手、東京大学農学生命科学研究科講師を経て、現職。著書に『稲の大東亜共栄圏』、『ナチスのキッチン』、『食べることを考えること』などがある。

てくるモデルが「食べる通信」だと思えます。そのモデルの中では、これまで「資本主義の矛盾改修装置」としてあった家族が、もうちょっと楽しい家族になり、かつ、「食べる通信」に見られるような新たな人と人とのつながりを生み出していく。

高橋:「資本主義の矛盾改修装置」というのは?

藤原:資本主義というのは、あらゆるものを商品に変えちゃうシステムなんです。労働力もそう。人間という呼び方があったはずなのに、7時間1万円の労働力商品に変えちゃった。そのように本来は商品とは絶対いっちゃいけないものを商品化することによって、何か新しいものをイノベーションしていく、成長至上主義的な直線世界があったわけです。その中で家族はどう位置づけられるか。ふらふらになって帰ってきたお父さんを「次の朝までに、ちゃんとした労働力商品としてメンテナンスして返してください」という装置なんです。そういう意味で、家族にしわ寄せがくるシステムですね。

高橋:なるほど。今はもう家族では改修しきれなくなっている……。ア

科学を超越する おばあちゃん物語をつくる

高橋:先生は雑誌の寄稿記事の中で、膨大なお金をかけられて肥大化したこの広告宣伝の世界に拮抗してこういいうとき、自然食品だとか、オーガニックだとかという付加価値の上げ方はもう違うだろうと書いていらした。そこで例に挙げたのが「朝市」でしたよね。朝市では、果たしてこの農家は信頼してよいか、子どもに食べさせてもよいものかと品定めが行われている。一方で相手もこちらを品定めしている。ふたりの間のごによごによの中で、価値が決まっていくということですよ。

藤原:そうです。「このコップを僕は売りたい。あなたはいくらだと思っ?」「君、そんなにがんばってつくってないでしょう。100円で買おうよ」という会話を5分くらいしないと、価格って決まらない。面倒くさいことなんですよ。これは、要は消費者と生産者、売り手と買い手

の、まさに「あいだ」でどう信頼するかのやりとりです。僕は、有機農法とか無農薬とかの問題もそこに注ぎ込んだほうが、よっぽど居心地の良い社会になると思えます。今、みんな有機野菜という記号を見ただけで、水着姿の女性の写真を見るかのように欲望しちゃう。いや、写真を見なくても「有機」という字だけで食べものを買うのは「水着」という文字に欲望するのと一緒ですよ。そうではなく、このおばあちゃんが「一生懸命つくったんだよ。見てごらんこの弾力!」と言ってくれたこの野菜に惚れたなら、このおばあちゃんが裏で大量の農薬を使っているのがいまいが買いますよ、という社会。

高橋:僕は、この前香港に行ったとき、地元は何年も住んでいる友人に老舗の飲茶屋さんとか、ミシュラン二つ星だとかに連れて行かれたんです。確かにおいしい。でも、すでに記憶に残っていないんです。で、結局夜は路地裏の屋台に(笑)。水回りはどうだ? 入り口に枝肉が吊るしてあるけど大丈夫かと、結構品定めをして、思い切って入る。で、よくわからないメニューを片言の言葉を使って頼み、地元の人たちが食べているものを見ながら同じものを頼んで食べたときの、あの体験は忘れない。これって、先生が言った朝市と

藤原：そう、お互いの間がつつつと滑走していくような世の中です。対して、高橋さんがお書きになった『都市と地方をかきまぜる』に、秋田の米農家さんの話がありましたよね。田んぼが水に浸かってしまい、Facebook で「一生に一度のお願い」と稲の手刈りのお手伝いを呼びかけたら、人がたくさん押し寄せたと。そういう風に間がにぎにぎしくなること、ガシガシかみ合ったり、傷ついたりして活性化することが「生きる」だとしたら、「食べる」とは……

高橋：「関係」が見えなければいけない、ということですか？

藤原：そう、関係なんです、生きるということは。

高橋：この石田徹也の絵は、関係が断たれているということですかね。

藤原：はい。この店員のお兄さんは、目が向いていないんです、このサラリーマンたちのほうに。向いていたらここから「生」が生まれるはずなんです。たとえこういう食べものだったとしても。このサラリーマンは、モノ化している。

家族とは資本主義の矛盾改修装置

高橋：昔のコミュニティって、せいぜい家族、親戚、同僚、地域住民くらい。150 人程度の

顔の見える関係の中であって、自分が誰の役に立っているかがわかりやすかったと思うんです。それが今、(交通手段や情報通信技術の発達によって) 解き放たれ、流動化していく社会の中で、関わる相手の選択肢が無限にあって、みんな深い関係をつくるのをこわがっているように見えます。恋人も夫婦も仕事のパートナーも取っ替え引っ替え。つるつるした関係ですよ。

一方で、だからこそ、損得ではない関係、嫌なこともあるけれどガシガシはまっていくような関係が求められ始めているのもすごくわかる。それを一番実現しやすいのは、僕は食べる場ではないかと。食べるものをつくる人と、食べる人。こんなにわかりやすい関係はないと思うんです。今、日本には「孤食」が広がって、家族観も変容している。「拡張家族」という言葉が適当かどうかわかりませんが、家族を代替するような場が必要ではないか……という考えと、先生がご本に書いていらっしやっ「公衆食堂」(*)の考えを、僕は重ね合わせて読んでいました。

藤原：もちろん、歴史的に振り返れば、狭いコミュニティというものには異もあつた。それは差別問題です。江戸時代からあつた「村」は、当時の被差別部落を常に意識して、「自分たちは違う」という差別を抱えてきたんです。また、狭いコミュニティに自由がないと感じる人は、女性により多かったと思います。ぎゅ

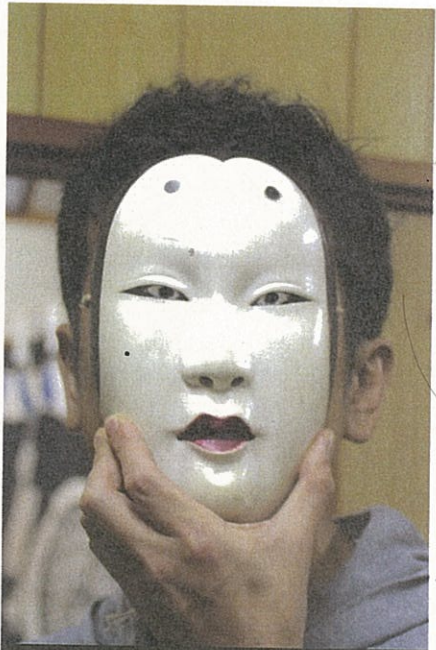
うぎゅうしたコミュニティの中であって、家から出て何かするということしがづらい社会になり得る。その意味で、狭いコミュニティにはマイナス要素もあるかもしれない。

ただし、僕がなぜ公衆食堂の話をしたかという、そういったぎゅうぎゅうしたところから逃げたい人でも、食の場であれば「あいだ」をつくれるだろうと考えたからです。なぜなら、食べることは生きることだから。しょうがないからその場に行くわけです。今まで「家族」とか「村」が持っていた、ある意味の凝集力のバージョンアップとして、もうちょっとドライな人でもドライに参加できる場所、「食べる」を通じて最低限、つながってられる場所。そういう意味で、公衆食堂というものを考えたんです。

(*) 現在、生きものの生命を奪う場所と、その亡骸を美味しく食べる場所があまりにも遠く離れすぎていて、食の物語が分断されている(だから三〇秒のCMになりやすい)。そのかわりに、田畑、魚市場、湖、池、直売所や食肉加工場といった場所の近くが、食べることの拠点になる社会を設計する。たとえば、安価で美味しい食事が可能な公衆食堂を設置する。そこで、生命が奪われていく過程と生命が育っていく過程を近接させ、生命が奪われていく過程に携わる人びとと、奪われていった生命を自己の生命維持のために取り込む人びとを交流させ、融合させようとする努力することで、「生命のサイクル(循環する物語)のなかで生きるわたしたち」を確認するのである。

「食べもの」という幻影(「食べることを考えること」所収)より

僕は、高橋さんの『食べる通信』という試みが次のステップに行ったときには、貧困の間



高橋 博之 ● 本誌編集長
1974 年、岩手県花巻市生まれ。2013 年、政治家から事業家へ転身、NPO 法人「東北開墾」を立ち上げる。近況は、靴下 4 枚重ね履きして、冷えが原因とみられた痔を自力で克服するも、本誌編集中に、講演に訪れた韓国でチゲ鍋を連日食べ、帰国後再発する。

題が絡んでくる気配を感じます。なぜなら今、日本の貧困の一番大きな問題は、政府的な考えが「家族で何とかしてくれ」というものだからです。このモデルはもう、早晚つぶれるだろうと。そうなったとき、「助けて!」という声に対してまったく家族ではない人がやっ



対談：食べることは生きること

農業経済学者 藤原辰史 × 本誌編集長 高橋博之

知性とは、「危ないかどうかは、社会通念ではなく最終的に自分で判断する」ということ。

高橋：知性とは、「危ないかどうかは、社会通念ではなく、最終的に自分で判断する」ということで合っていますか？

藤原：そう、知識をフル稼働して判断する。それと僕は、食べものだけでは判断できないと思うんです。「人」がいるので。人を読むのは本を読む以上に難しい。おばあちゃんの顔を見て、口調を見て、ああ、きょう徹夜でやったのか…と読み込む。情報はおばあちゃんと、売っているものと、市場の雰囲気、それだけ。場合によっては自分の中の本の知識もフル活用して、そのおばあちゃんに對峙する。こんな知的な営みってない。

高橋：知的でもあり、野性もありますよね。

藤原：そう。僕も知性と野性の融合というのは大事だと思っています。島根大学にいる歴史学者の板垣貴志さんが「野の学問」と言っているんです。これは何かというと、歴史資料というのは図書館や公文書館にだけあるのではない、農家の蔵にあるんですよ。農家のおっちゃんが、自分が今までにこういうものを購入したとか、こうやって牛を飼ってきたという資料です。歴史研究者たちはそれを整理して、読み込んで、論文にしていってくださるんですが、どの辞書にも出てこ

ない、まったくわからない単語が出てくることがあると。でもその農家に聞くと、「ああ、それはこういう意味だ」とすぐに答えてくれる。そういった Google で検索できない言葉に出会ったとき、その野の学問において、知性と野性が合体するという気がしますね。

高橋：ああ、何となくわかります。店でおばあちゃんが指突っ込んだラーメンを食うかどうかというの、知性と野性を合体させないといけない。

藤原：そう。指を突っ込んだおばあちゃんのラーメンがまずい可能性もある。それも見極める。「食べてきやー」っていう笑顔のやさしいおばあちゃんだけれど、どうやら大してがんばってつくっていない(笑)。そうすると、次は自分の胃袋と相談して、それでもこのラーメンを食べるかを考える。それはやっぱり、おばあちゃんと話す中で見つけていくことです。

高橋：本当に、石田徹也のこの絵とは真逆の世界。でも、多くの人がこれを利用しているというのは、やっぱり忙しいから。忙しさの中で簡潔に食べさせてくれる場なんですよね。

藤原：おばあちゃんと本気で對峙していたら 2 時間かかりますからね(笑)。

高橋：さっさと食って仕事に戻る(笑)。効率的なんです。何が違うかといえば、おばあちゃんの世界は非効率かもしれないけれど、端的に言えば「文化」というか……。僕らは人間ですから。(次号へ)

構成=保田 さえ子

込んだ

スーパーの違いに似ているなあと思うんです。市場や屋台では、自分で目利きをしないとイケない。それはリスクを背負うということだと思うんですが、何でこう記憶に残るのかなあと。

藤原：それは、まさに危険だからですよ。この店が毒を盛るとはいわんけれど(笑)、この人、トイレ行ったまんま手を洗ってないんじゃないか? とか考えるじゃないですか。高橋さんのいうリスクは、企業が考えるリスクとは違うんですよ。計算できない。自分がつくる「物語」によって消せたりもする。例えば、その店のおばあちゃんが、器に親指突っ込んでるじゃん! というようなおばあちゃんでも、これがおいしいと思えば、そう思うための物語をこっちで一生懸命つくりまますよね。「おばあちゃんの親指から菌がいっぱい出て、汁の中に 1 億個広がっている」という物語をつくる人もいるだろうけれど、「この団子汁には、おばあちゃんの愛情、「おばあちゃん汁」が染み渡っている。どんな味の素よりいいだしが出ている」という物語を描いて食べるというのは、相当の教養が必要。知の戦いです。

高橋：いやあ、知性ですね。

藤原：菌というのは手を握ろうが、抱きつこうが移動するわけで、その団子汁に大量のおばあちゃん菌がうようよしているイメージは、科学的に正しい。でもそのイメージ、科学的物語を超越するような物語を、どう自分で即興的に考えて買うか。「うめえ!」となるか。

「一切れのパンを求めてあくせくする」ことから解放された人間は、もつと精神的なことにじっくり取り組むことができ、人間はもつと成熟する、とヴィーテクは信じる。肉体は分解に向かうが、精神は建設に向かう。肉体の分解さえ止めることができれば、精神は果てしなく成熟していく。(中略) けれども、ヴィーテクの主張は、三〇〇年生き「退屈」に悩まされてきたエミリアによって一蹴される。「芸術はね、人間がそれを完璧にできないかぎりにおいて、意味をもつのだ」。

人類の耐久性 チャベックから考える<上> (藤原辰史著・『現代思想』2016年3月号所収)より

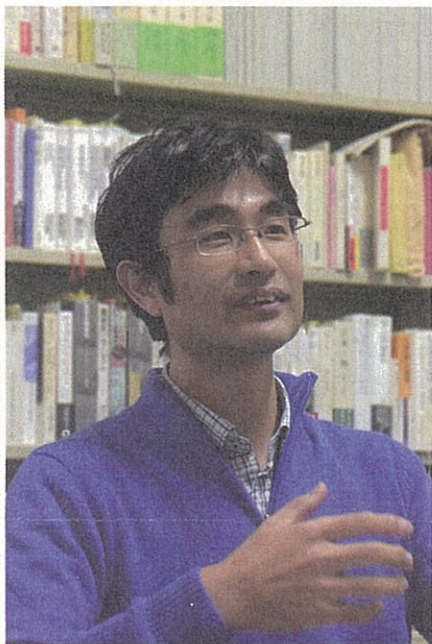
あんたたちは長生きするつらさ というのが何もわかっていない

高橋博之(以下・高橋):資本主義社会において、食事は何も生産しない非合理的な時間です。ゆっくり談笑しながら飯を食ってる暇があったら働けと。しかし、他人と食事を囲んで食べるという行為は生き物の中で唯一人間だけがする行為であって、人間を人間たらしめる文化的な行為と言えます。そして何より「命には限りがある」ことを唯一確認できるのが食べるという行為です。そうした本来の食の時間を取り戻すことができれば、未来の成長のために今を犠牲にするような生き方の価値が相対的に下がって、他者や自然を収奪しない脱成長的な生き方に変わっていくはず……というビジョンがあったんです、このあいだまで!

ところが最近、薄々とは知っていたAI(人工知能)について改めて詳しく調べてみてわかったのは、彼らは究極のイノベーションは“不死”だと本気で言ってるんです。僕は「は?」と思ったんですが、GoogleのAI開発のトップのレイ・カーツワイルは、食べるという「わずらわしい行為」がなくなるんだと書いている。

藤原辰史(以下・藤原):うわあ……。

高橋:体内に投入されたナノロボットが、必



藤原辰史 ● 農業史研究者

京都大学人文科学研究所准教授。40歳。京都大学人間・環境学研究所中途退学、同年、京都大学人文科学研究所助手、東京大学農学生命科学研究科講師を経て、現職。著書に『稲の大東亜共栄圏』、『ナチスのキッチン』、『食べることを考えること』など。月刊誌『現代思想』にて「分解の哲学」を連載中(2017年2月現在)。

なくてはいけない。年金がなくちゃ生きていけないし、医療費も豊富でなくちゃだめだと、立ち上がりますよね。

でも、少なくとも、今のままでは再分配機構としての国家は立ち行かなくなっていく。考えたくないのですが、国家が「借金しすぎてもう無理です。ごめんなさい」と言って破綻

したとき、僕は初めてローカルな世界が、とても厳しいけれども切実な、生きる世界そのものになると思うのです。しかし、破綻すれば、すさまじい数の人々が生きていけなくなるでしょう。今、起こっているのは、国家がまだ残っている段階で複層的に、ローカルな世界が国家的現実とは違う地層でうごめいていること。地層みたいに折り重なっているのが面白い。その地層のなかで最も活動的で「国家」的な役割を果たす層が、スモールダウンしたローカルな世界になる日もくるかもしれません。

高橋:それは過去にあったローカル、地縁血縁だけで結びついた内に閉じた共同体とはまた違って……

藤原:はい、違うふうになるべきですし、違うふうになる可能性が高いと思います。なぜなら、血縁と地縁の要にあたる近代的な家族制度がもう持たないから。これだけ少子化が進んで、自分を養ってくれる子どもがいるかいないかわからない。家族だけではもう人間を育て、養っていくことが難しい状況になっていく以上、ローカルには必ず、家族外の人たちとのつながりが出てくると思う。

要な栄養情報を無線LANで発信して適時適切に摂取できる。寿司屋に行きたいと思えば、バーチャルリアリティでもそこで食べているかのようにリアルを味わえると。彼らは、そこに賭けるだけの価値あるイノベーションだと言いますが、僕は、失敗したら人間がAIに取って代わられるようなこんな博打に盲目的に乗りたくないと思うんです。

藤原:同感です。今の話に通じるんですが、僕が雑誌『現代思想』で連載している「分解

の哲学」という論文のなかで、カレル・チャベック(1890-1938)の『マクロプロス事件』(1922)という戯曲について論じたことがあります。不死の秘薬で300年生きたエミリアという女性を描いた物語なんですが、このなかで、その秘薬の処方箋を手に入れた男たちが議論するシーンがある。そのひとり、ヴィーテクは「人類全部に三百年の生命をあたえたまえ!」と言う。一方で、その薬を飲むのは選ばれた貴族だけだという人もいて、盛り上がっている。A

かっこええや おれたち分解 やってんねん

悪くいえば言葉の化かし合い よくいえば言葉の交わし合い

高橋:僕は今まで、風通しの悪い内に閉じた共同体と、風通しのよい外に開いた都市の社会は相容れないと考えてきました。でも、都市もこの通り行き詰まっている中で、一部でも重なる世界がつかれないかというところにすごく興味がある。要は“いいとこどり”です。「食べる通信」では、価値で結びついた人たちが、地縁血縁だけで埋められないものを補い合うような関係を部分的につくっているんです。

藤原:僕は、そういう都市と田舎がクロスするような役目を歴史上で一番果たしてきた場は、マーケット、市場(いちば)だったと思う。市場は、物と人が互いに交換、交流する場ですよ。幸徳秋水(1871~1911)のエッセイに「世田ヶ谷の襦袢(ぼろ)市」(1903)というのがあります。世田ヶ谷で昔から続いている、いろんな古いものを売るフリーマーケットなんですけれど、20世紀の初頭もとても生き生きとしている。農村の人はそこに野菜を売りに来ていて、都会の人は買い物に来ている。農民たちは、足袋、股引、シャツ、手袋、場合によっては足袋の片割れ、古くなった着物などを買いに来る。まわりには屋台が並んでいる。そ

こに交流があるわけですが、その雑多な感じがいいんですよ。そういう場って歴史的にたくさんあったはずなんです。農村と都会は水と油ではない。でも決して水と水ではなく、うまく交わらないんだけど、「出会う」場があったと思う。

で、「食べる通信」の試みで見られるのは、そこからもうちょっと踏み込んでみよう、というものです。マーケットのあと、おばあちゃんの軽トラと一緒に乗って行って、「うちの畑はこれ。一緒にやってみようか」と。市場がアメンバーみたいに糸を引いて、もうちょっと先まで伸びて行っちゃうようなイメージです。農家が都会に来て売るという形で、こっちに向かって伸びてくることもある。そういう新しい都市農村モデルをつくっておられる。

そして、その中心にお金ではなく“言葉”という評価機構をおいていますよね。普通は需要と供給によって値段が決まるんだけど、ここでは悪くいえば言葉の化かし合い、よくいえば言葉の交わし合いによって相対的に価値が決めていく。だからこそ、集まってA

するとエミリアが彼らを軽蔑して吐き捨てるように言うんです。あんたたちは長生きするつらさというのが何もわかっていない。芸術というのは完璧でないからあれだけ美しいのよ、と。死が目の前にあるからこそ、自分は未熟で到達できなかったとって終わるからこそ生が尊んだ、ということを書いて、エミリアはその生を終えます。

僕は、死なないことや老いないことが魅力だとは思わない。今、アンチエイジングブームですけど、老いること、熟すことって美しいことだし、カッコいいことだし、いつまでたってもキャピキャピ若くてちやほやされる人生というのは現実問題として生きづらい(笑)。ある程度のいぶし銀の魅力というものを見たときに、人は「かっこええなあ」となるものだと思うんです。それが、AIに突き進んでいる人たちの中にはまったくないと……。

高橋：ないですねえ。

所詮、粒子1個だよ

藤原：先日、『現代思想』(2016年11月号)で宇宙物理学者の池内了さんと対談したなかで、今まで世界を動かしてきた科学は、原発にしろ、IPS細胞にしろ、宇宙科学にしろ、すべてピッ

グサイエンスだったね、という話になりました。人を大勢雇って巨額を投じた“大きすぎる科学”が我々を支配してきたけれど、それって本当の科学のあり方だったのか。巨大な装置をつくってヒックス粒子を見つけたけれど、所詮、粒子1個だよ。それよりは、例えば、地域の水質汚染や大気汚染を調べたり、田んぼに飛んでくるトンボを数えたり……。高橋さんがご著書『都市と地方をかきまぜる』のなかでお書きになっていた、あの津波があつて三陸の牡蠣がおいしくなったというお話。これだって科学です。科学ってそのくらいの規模でもいいんじゃないか、という話をしていたんです。

「食べる通信」の試みなんかは、AIがもたらすような社会に対して、少なくとも穴を開けていると思う。それは僕が考えようとしてきた“あいだ”を取り戻していくようなことでもあり、スケールダウンしていくこと。そういう社会がぼこぼこあちこちに起きて、ちょっとずつ、大きすぎる社会に支配された現実社会を上書き保存していく。そんなビジョンは描けるんじゃないかと思えます。

ローカルの中で 生きているってことが 世界的に生きること

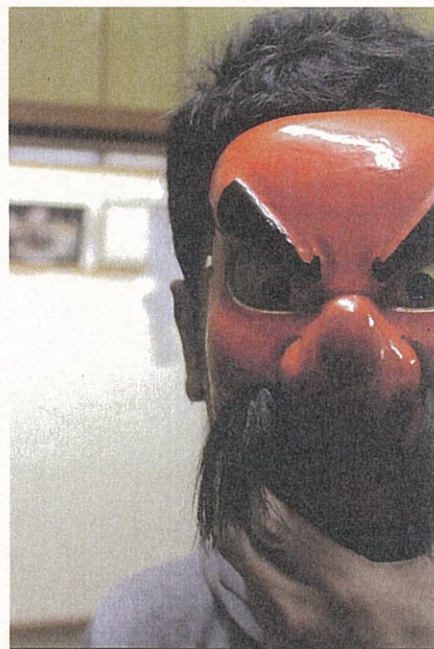
高橋：僕が農村を回っていて思うのは、「自分の集落で、目の届く範囲の人たちがいかに幸せ

に生きていくか」とともに、「自分の集落が、アジアを含めた世界の中でどういうところにいるのか」の視点が必要なんじゃないかということ。日本は課題先進国と言われますが、その課題を先取りしている農村は、つまり世界の先頭に立っているんですよね。僕は、人類が続かなかつたら集落が続いたってしょうがないと思う。だから、人類が100年先も続いていく方に向かって、ローカルの小さな集落が次の一步を踏み出していく。そんなふうに“マクロ”と“ミクロ”を行き来してあがいて、進むべき道を模索していくことが大事な気がしています。

藤原：そのためには、ローカルであること、ローカルの中で生きているってことが、一方で世界的に生きることもなるんだと知り、伝えていくことしかないと思う。つまり意義づけですね。何らかの言葉、「食べる通信」でいえば物語を付与することや、語り合い中で“地球の意味”を与えていく。「ローカルに生きる世界プロジェクト」というものがあるとすれば、その先駆者ですから。

高橋：なるほど……。先生は、近代国家という枠組みについてはどう考えていますか。

藤原：近代国家は、金融の流れが第一という今の新自由主義的な流れの中では、じゃまものです。国家は、国民を守るための福祉費として、企業からの税金という収益を再分配する役割を果たしているんだけど、今のグロー



高橋 博之 ● 本誌編集長

1974年、岩手県花巻市生まれ。2013年、政治家から事業家へ転身。NPO法人「東北開墾」を立ち上げる。人工知能開発へと突き進む時代の流れへのせめてもの抗いとして、ノートパソコンとスマートフォンを交互に手放す生活を敢行している。

バル企業というものは、その税金から逃れられるような場所を求めているわけですから。このままいけば、国家は多分、グローバル企業の派出機関、グローバル企業の活動のための調整機関のようなものに役割が変化していくだろうと思う。ただ、僕たちは生きていか

る、

小誌編集長・高橋博之が、その言葉と哲学に惚れ込む農業史研究者・藤原辰史さん(40。京都大学准教授)との対談が実現した。前編(2017年1月号掲載)では、生きること、食べることはどういうことかや、食にまつわる知性・野性について語られた。後編は人工知能にまつわる議論から、農村、農業の意義へと展開していく。

来る人間の価値も年収や財産で判断されにくい。新しいなあと思います。

高橋：読者は「うちの長男が、今までに食べたエビで一番おいしかったと言ってた」と伝える。漁師は「うれしいです。では出航します!」と言って出ていく。この会話が、単にモノを届けるだけでは味わえない満足感を双方にももたらしているんです。

藤原：高橋さんは“いいとこどり”とおっしゃいましたけれど、“悪いとこどり”でもありませんよね。悪いところもお互いに共有して次善策を考えよう、という流れです。「獲れないときにはがまんしましょう」という考えが成り立っているわけですから。それがなぜ可能かというと、お金ではなく“言葉”が介在しているからです。

循環過程を手伝う。 要は糞まみれになって 仕事している

高橋：かつて、全国の農漁村から東京に出てきた人たちが出自を語ることがはばかられる時代がありました。そのメンタリティは今もなくなっていないと、僕は思っています。田舎ですら、農家の子は親に「授業参観に来るな」って言うんです。軽トラックで汚い作業着のまま来るなど。食べものをつくる仕事が恥ずかしいというこのメンタリティがどこから来ているのか、僕はすごく不思議で。これって、日本人が

アジアを下に見てしまう価値観にも似ているというか……。要は西洋的なものを文明ととらえて、文明以前の“自然”に近い世界と未だ接している人たちを、野蛮だとして下に見る価値観。それゆえに農業を恥ずかしいと思ってしまうこのメンタリティが、どうすれば変わるのかなあと。先生はどう考えますか。果たして100年後に日本の若者たちが農業をやっているか。考えたくないですけど、ロボットと外国人労働者と輸入に頼らざるを得なくなっていくだろうと思うんです。

藤原：まず、日本の歴史というもの、農民を下に見てきた面がありますよね。農民の下に、えた・ひにと呼ばれる層をつくることによって、農民たちをなだめすかしてきた徳川の時代が何百年とあった。つまり、社会的にそういう身分構造がつくられてきた側面があります。

もうひとつ、これは僕のごく個人的な体験ですが、物理的な側面があるだろうと。僕の島根の実家では乳牛を2頭だけ肥育していたので、牛の糞をわらに混ぜて堆肥化する作業を毎日するわけです。牛がじゃーっとおしっこをする。その水たまりにぼとっ、ぼとっ糞が落ちて、土が茶色くなって、においがわっとしていて、ハエがぶんぶん飛んでいる。そこにおじいちゃんがフマキラーをぶわーっかけている……。みたいなことが中高生の僕には、今では本当に恥ずかしいのですが、かっこ悪く見えたんですよ。

この心理がどこから来るのかと考えると、農業は昔、人糞尿を使っていたし、排泄物を再利用する職業だということにあると思います。えは昔、獣の皮などを使っていた。ひにんは人の死体とか、ゴミの処理をやっている、そこに人は汚らわしさを見ていた。いじめもそう、最近も問題になりましたけれど汚いだとか、菌だとかと言う。人は、自分以外の人に“けがれ”を感じたとき、差別感を抱きがちです。農民も、今っぽい言い方をすれば地球の循環過程のお手伝いをしているんですが、要は糞まみれになって仕事している。その不潔さとかにおいが、今の日本でもやっぱり鼻についているんだと思うんです。

分解機能はかっこいい

藤原：では、どうすればいいのか。僕が今試みているのは、先ほど話した「分解の哲学」という連載です。生態学において、自然社会には生産者・消費者・分解者の3者がいる。生産者は植物です。太陽光を使って光合成をして炭水化物をつくり出す。消費者は植物を食べる草食動物、そして肉食動物です。分解者は、その2者の排泄物、あるいは死んだときに分解して土に返す作業をしている生物。この分解者の“分解”機能を、人間社会も含めて、もう一度、尊く美しいものなんだと価値づけなおそうというプロジェクトなんです。ゴミになったものから必要なものを取り出すことや、牛の糞尿を土に返すことがどれだけあなたの命に関わっているかということ

対談：食べることは生きること

農業史研究者 藤原辰史 × 本誌編集長 高橋博之

を、ひたすらしつこく書く(笑)。「マクロプロス事件」を取り上げて、アンチエイジングに狂騒する人々の批判を書いたり、分解することの美しさを伝えたりして、何とか価値転換をやりたいと思っているんです。

「食べる通信」では、農家の親父も漁業のおばちゃんも、しわも銀歯も全部隠すことなく映っているんだけど、それでも、いや、それだからこそかっこええと思わせる伝え方が素敵だと思う。今までのほとんどの学問には、背筋がゾクとする感覚が欠けていたんです。「わ、かっこいい」の「わ、」の表現ができていなかった。その感じを伝えるために、僕は分解者という言葉で農民たちを再定義しようと。

高橋：いいですねえ。循環する肝になる人たちですね。

藤原：そう。ただ、循環という言葉は行政もかなり使っていますよね。循環、サイクルというと核燃料サイクルだってそうだし、何だか使い古された行政用語になってしまう。だからその手前で止めて、まさに肝の“分解”に注目しているんですよ。

高橋：分解をする人たち。

藤原：そう。かっこええやろ、おれたち分解やってんねん、って。

構成=保田 さえ子